

5 産業と民俗～農村のくらしと文化～

那須塩原市の市域の約半分は、那須扇状地の扇頂部から扇中部に当たり、古来より扇頂部付近と扇端部に近い湧水地付近や川沿いの地域に村落が発達していましたが、大部分は田畑に適さないやせた土地でした。

そのため、開拓地の現金収入の手段として黒磯地区・狩野地区では葉タバコが、西那須野地区では養蚕が特に盛んでした。また、那須地方は古くから馬産地として世に知られており、農耕馬や軍馬の産地として第2次世界大戦終結まで日本の主要産業に位置付けられていました。

「那須おろし」や「高原おろし」とも呼ばれる、那須岳や高原山から吹き降ろされる冬季独特の強風から家屋を守るため、屋敷林や土塁などが設けられました。「ヤウラ」と呼ばれる防風林を備えた家並みが街道沿いに並ぶ列状集落は、この地ならではの特徴的な景観といえます。

そして、扇状地特有の生活風土の中、古くから集落を形成していた高林地区には農耕儀礼として発展した獅子舞や念仏舞が、また、塩原地区には大田原藩とゆかりがある城鉾舞などの特徴ある民俗芸能が伝承されています。いずれの民俗芸能も、その地域の歴史と文化に根付いた貴重な遺産として保存していく必要があります。

1. 那須野が原の農業～畑作・稲作～

市内の平野部は、北西部に広大な山岳地帯（標高 1,000 m 以上）を抱え、北を高久丘陵、南を喜連川丘陵に囲まれた盆地性の扇状地となっており、北東を那珂川、南西を箒川に挟まれた市域の平野部のほとんどが扇頂部から扇中部に位置しています。

こうした扇状地特有の自然風土の中、南東部の湧水点及び山地端部に古くから集落が営まれてきましたが、小規模な水田経営が行われたと考えられます。江戸時代からは、本格的な水利開発で水田面積も広がっていきましたが、多くは畑地だったようです。水田面積が増加したのは、大正年間に始まり戦後に飛躍的に拡大した地下水の利用によるものでした。

また、昭和 42 年（1967）2 月着工、平成 7 年（1995）3 月完了の「国営那須野ヶ原総合開発事業」により大規模な土地改良事業が行われ、現在の田園風景が生まれました。



現在の農村景観



農地を流れる用水



乃木希典那須野旧宅敷地内の
覆い屋付井戸及び揚水ポンプ

葉タバコ

八溝山麓の山村地帯は、古くから葉タバコの主要生産地として知られており、県内では、旧那須郡の馬頭付近での栽培が盛んで、「大山田葉」が良葉として評判でした。江戸時代初期には那須地区でも葉タバコ栽培が伝わったようです。鍋掛・東那須野地区で生産された葉タバコは、一般に「原方物」と呼ばれ「光沢佳ナラズ葉脈粗大香気ニ乏シク且火付宜シカラス」（「大田原煙草調書」）と評価は低いものでした。明治時代になると、大田原に専売所が設けられ、西那須野地区の旧狩野村でも栽培が盛んになっていきました。槻沢地区には「煙草大神」（昭和 15 年（1940）建立）という碑が残っており、往時の葉タバコ栽培の隆盛を物語っています。

葉タバコの栽培は戦後も拡大しましたが、ピークとなる昭和 38 年（1963）を境に作付面積及び耕作者数が半減し、昭和 40 年代の「開田ブーム」による米作への転換のため、更に減少の一途をたどりしました。

一大生産地であった木炭

大農場の山林事業の一環あるいは、農家の副業として大量の薪炭の生産が行われていました。また、明治 18 年（1885）の鉄道の開通を機に黒磯駅前には多くの薪炭商が開業して、「薪炭の町」と呼ばれるほどの賑わいを見せました。大正時代の黒磯駅での木炭貨物発送数量でも年間 16,000 t を超える取扱高でした。木材も大正 3 年（1914）の年間 4,000 t から 5 年後の大正 8 年（1919）には年間 13,000 t を超えて 3 倍強となり、拡大する東京都心の需要に応えてきました。

県内から出荷される木炭は「野州炭」と呼ばれ、北那須地域はその主要な産地として不動のものでした。特に、広大な山林を占める高林地区では大正 2 年（1913）には年間 1,800 t もの生産を行い、黒磯地区とあわせると北那須地域の 4 割の生産を行っていました。

戦後では、昭和 32 年（1957）をピークにその 6 年後には半分以下に生産は落ち込み、家庭でのエネルギー需要の変化の中で減退の一途をたどりしました。

2. 那須野が原の畜産業～馬産・養蚕～

馬産

那須野が原は、昔から馬産地として世に知られていました。那須東原は古くは大輪地原という原野であり、これを取り巻く 44 の村々は、長い間豊かな草に恵まれて馬を愛育してきました。

明治期になって牧牛馬畜産会社などが設立され、馬の飼育がますます盛んとなり、明治 23 年（1890）には黒磯の倉光三郎らが豊浦農場に競馬場（現黒磯小学校）を設け、大いに産馬奨励に努めました。

大正年間には、それまでの在来馬から洋種を含めた「改良馬」の飼育が盛んになり、後年産馬組合も設立され、日清・日露両戦争により軍の要請も急速に増大し、常に 5～6 頭の馬を飼育する農家は少なくありませんでした。しかし、第二次世界大戦敗戦による軍の崩壊により需要の主体を失い、農耕の機械化と酪農の増大につれその姿を消し、昭和 44 年（1969）黒田原を最後に産馬せり市は廃されました。

養蚕と製糸業

明治になると、養蚕が現金収入の副業として盛んに行われるようになりました。開拓農場の開墾に際しては、移住者に「天蚕」飼育が奨励されました。また、養蚕の盛んであった長野や群馬からの移住者により、養蚕技術が当地域にも導入され、養蚕の振興が図られました。昭和9年（1934）の栃木県統計では、西那須野地区で農家戸数763戸、桑園面積は527.1haとなっており、黒磯・東那須野・高林・鍋掛地区が農家戸数768戸、桑園面積206.5haと農家戸数ではほぼ同じですが、面積が倍となっているなど、とりわけ開拓地において養蚕が盛んであったことが分かります。

開拓地の養蚕は、明治国家が勧めた殖産興業・富国強兵のスローガンと共鳴して、近代日本の経済を支えてきました。

分野	名称
未指定文化財	蚕金神社・養蚕神社・保食神社・農蚕影神社・蚕玉様・煙草大神碑
その他文化資源	天蚕場

3. 本州一の酪農地域～明治の大農場から戦後開拓へ～

明治13年（1880）に三島通庸が発起人となり、牛の飼育を目的とした^{さつちょうぎゅうしや}茁長牛社が発足しました（茁：動物が成長する様）。500町歩の牧場を持ち「牧牛」繁殖のために、山形・青森・岩手などから和牛を買い入れたほか、西洋種の牛の飼育も試みられました。しかし、牛の飼育は容易ではなく、明治14年（1881）から1年のうちに97頭の牛が病死するなどしており、明治19年（1886）には解散し、初期の畜産・酪農は挫折しました。これとは別に、県営那須農場を引き継いだ豊浦農場（毛利農場）や共墾社が、主に西洋種の牛を50から100頭前後飼育しましたが、明治26年（1893）頃には飼育を停止しています。豊浦農場では、明治29年（1896）以降は緬羊の飼育に移行していたようです。

市内における酪農・畜産が盛んとなるのは、戦後開拓として入植した農家の努力によるものと考えられます。黒磯地区の生乳生産量は、「山麓酪連」の取扱高でも、昭和30年（1955）から昭和45年（1970）の15年間で、当初の246,519kgから9,147,542kgと37倍の伸びを示しています。

現在では「畜産の盛んなまち」となっており、農業産出額の70%を畜産が占めています。そのなかでも特に酪農が盛んで、乳用牛の飼養頭数は約23,535頭（平成30年（2018）2月1日現在）となっており、生乳の産出額は全国で第4位となっています。第1位から第3位が北海道ですが、本州以南においては第1位を誇っています。

戦後開拓地

太平洋戦争が終結した昭和20年（1945）8月には、国家再建の一大柱として、食糧増産を目指した開拓事業が計画されます。県内の「北那須地区」はその開墾適地の一つとして選ばれ、旧軍用地であった埼玉飛行場跡や戸田・藤田農場の未開墾地などが、除隊した兵士や満州開拓団の引揚者、農家の次・三男対策として開拓団の入植先となりました。昭和38年（1963）までに高林地区に22、黒磯・東那須野・鍋掛地区に13、西那須野に1、塩原に1という具合に開拓地が設定され、併せて1,520余戸、7,800余人、3,200町歩の開墾が行われました。これは県全体の6割に当たります。開拓地はその水利・土地条件や計画により、それぞれ酪農中心型・酪農稲作混合型・稲作中心型など大きく変化していきます。戦後の開拓の歴史が現在の農村風景を作り出してきたといえます。

4. 集落の特徴～日本有数の列状集落と「ヤウラ」～

市内には、道路に沿って農家を中心とした家が列状に並んだ集落が多く見られ、本市の特徴的な景観の一つとなっています。

列状集落は、旧奥州街道や会津中街道などの街道沿い、江戸時代の用水沿いに多く、特に高阿津用水沿いの集落は、もともと箒川沿いにあった集落が川の氾濫を避けて河岸段丘沿いに移動したもので、上大貫と下大貫は大田原市の上石上・下石上とほぼ一続きとなり、その規模は約6kmと日本有数といえます。これらの多くは計画的な集落で、宅地割をしてから家を建てており、一軒の幅はほぼ同じとなっています。

また、市内には〇〇新田という大字名がみられるのも特徴です。これらの地名は黒磯地区に多く、江戸時代初期に新しく開かれた村名が多いのですが、「新田」という地名が残る地区は、近世において新たに屋敷地及び田畑を開発した場所です。

那須扇状地には、那須岳や高原山から吹き降ろされる冬季の強風から家屋を守るヤウラ（屋敷林）が特徴的に見られ、一部には防風林の土盛（土手）などが見られます。ヤウラは農村地域を中心に見られますが、場所により「一面囲い」・「二面囲い」・「三面囲い」などの違いがあり、家屋の立地と卓越風の方向・強さにより選ばれてきたと考えられます。

こうしたヤウラをもつ景観は、住環境の変化などから急速に消えつつあります。



大貫地区の列状集落

■ 集落景観



屋敷林



屋敷林 入母屋



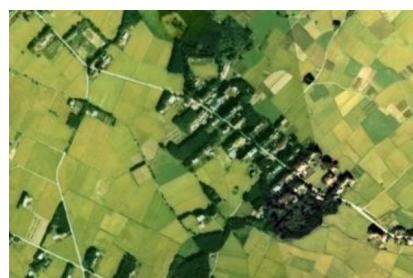
木綿畑集落遠景（背後は那須岳）



那須開墾社烏ヶ森農場跡の土塁



大山邸跡の土塁



箕輪地区（那須疏水北側）

5. 馬頭観音碑～圧倒する石像物～

本市には、「馬頭観音」や「馬頭観世音」と彫られた石仏や観音像の頭上に馬の頭の形が浮き彫りにされた石仏が多く残っています。特に、本郷町の馬頭観世音は、大小 16 基の石碑が那珂川河畔の旧原街道沿いに並んでいます。このほかにも、周辺の石碑を集めて祀った場所が各所にあり、馬頭観音碑も多く見られます。

昭和 45 年（1970）に県教育委員会が実施した調査では、本市は那須町に次いで馬頭観音の数が多く、黒磯、西那須野、塩原地区を合わせた数は 390 基に及びます。



本郷町の馬頭観世音

馬頭観音碑の多さは、那須地方において産業としての馬産が盛んであったことと関係があり、繁殖祈願や死んだ馬の供養として建立されたものと思われます。

6. 地域に伝わる数多い民俗芸能

市内には、^{ふりゅう}風流系三匹獅子舞又は一人立三匹獅子舞と呼ばれる、雄 2 頭が雌 1 頭を奪いあう様子を演じる獅子舞が多く伝承されています。また、これらの獅子舞は関白流（宇都宮上河内よりの伝承）と文挾流（今市文挾よりの伝承）のいずれかを名乗っています。

歴史的には 15 世紀半ば以降に公家文化や宮中行事が地方に伝わり、舞や風流踊り、綾踊りとして、街道を通過して北関東に伝播したものと考えられており、市内では高林地区に多く伝承されています。

獅子舞の多くは 3 月末から 4 月にかけて奉納されることが多く、また、オカメ・ヒョットコの面をつけた滑稽踊りも見られることから、豊作を祈る予祝芸の意味合いが強いと考えられています。

また、箒根地区では関谷や大貫に伝承されている城鍬舞や百村地区の百堂念仏舞等、獅子舞から派生したと思われる民俗芸能や、奥州街道や原街道などの「歴史の道」が伝えた「田植え唄」「もちつき唄」などの民謡や芸能も残っており、地方の風土に深く根付いた地域文化を醸し出しています。

これらの民俗芸能のほかにも、祭礼時の余興としてのお囃子や創作芸能としての和太鼓などが市内各地で保存伝承されています。

■ 市郷土芸能一覧

名称	備考	名称	備考
百村の百堂念仏舞	国選択無形民俗文化財	鍋掛もちつき唄	未指定
関谷の城鍬舞	栃木県指定無形民俗文化財	東那須野おはやし	〃
上大貫の城鍬舞	〃	子ども疏水太鼓	〃
塩原平家獅子舞	〃	太夫塚八木節笠踊り	〃
遅沢ばやし	那須塩原市指定無形民俗文化財	つきの木もちつき唄	〃
西富山の獅子舞	〃	那須苗取り田植唄	〃
関谷囃子	〃	三島おはやし・八木節	〃
上塩原源太踊り	〃	大山八木節笠おどり	〃
上塩原古代獅子舞	〃	関谷子供囃子	〃
三本木の獅子舞	〃	宇都野子供獅子舞	〃
木綿畑新田の太々神楽	〃	塩原温泉まつりお囃子	〃
木綿畑本田の獅子舞	〃	流響塩原太鼓	〃
高林の獅子舞	〃	黒磯巻狩太鼓	〃
嶽山箒根神社梵天上げ	〃	巻狩踊りお囃子	〃
曇沼もちつき	〃	埼玉子供おはやし	〃
那須野ヶ原疏水太鼓	未指定		